

エチクロゼートの7月、8月2回散布による「肥のあかり」の着色促進・品質向上効果

「肥のあかり」は、シートマルチ栽培と併せて、植物生育調節剤のエチクロゼートを7月下旬と8月中旬の2回散布することにより、着色が早まり果実品質が向上する。

農業研究センター 果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者 北園邦弥)

研究のねらい

9月下旬から出荷される「肥のあかり」は、小玉果になりやすい特性があることから、果実肥大促進を目的に、6月下旬から7月上旬にかけての粗摘果を強めに行う必要があり、成熟期の着色はやや遅れる傾向にある。

そこで、シートマルチ栽培と併せ、熟期促進剤や浮皮軽減剤として登録されているエチクロゼート(商品名:フィガロン乳剤)の散布を組み合わせることにより、着色促進と品質向上技術を確立する。

研究の成果

1. エチクロゼートを7月下旬、8月中旬に2,000～3,000倍で散布することにより、8月中旬、9月上旬の2回散布や無散布に比べて3分着色以上の果実割合が高くなり、1分着色以下の果実割合は減少する(図1、表1)。
2. 果実品質は、エチクロゼートの散布により無処理に比べ、糖度が高くなる(表2)。
3. 散布時期では8月中旬、9月上旬の2回散布に比べ、7月下旬、8月中旬の2回散布の効果が高い(表2)。
4. 散布濃度では、着色促進、品質向上効果ともに3,000倍と2,000倍の差は認められない。

普及上の留意点

1. 6月下旬よりシートマルチ栽培を行った園での結果である。
2. 結果樹齢が若く、樹勢が旺盛な場合には、樹勢を安定させる目的もあり積極的にエチクロゼートを活用する。
3. 樹勢低下が懸念される場合には、散布回数や濃度を考慮したり、散布を控えるなどの対応が必要である。

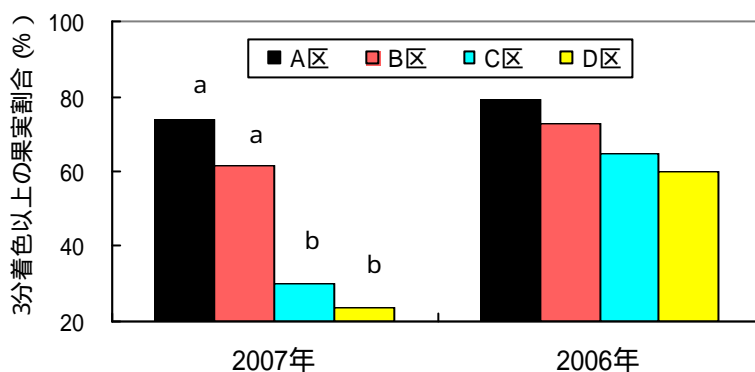


図1 エチクロゼートの散布時期・濃度の違いと着色促進効果

注1) A区 2006年 7月26日、8月15日2,000倍の2回散布

2007年 7月27日と8月14日2,000倍の2回散布

B区 2006年 7月26日、8月15日3,000倍の2回散布

2007年 7月27日と8月14日2,000倍の2回散布

C区 2006年 8月15日と9月7日2,000倍の2回散布

2007年 8月15日と9月3日2,000倍の2回散布

D区 無散布

2) 2007年10月1日収穫、調査

2006年10月3日収穫、7日調査

3) 図中のアルファベットは Tukey法により異なる異符号間に有意差あり

表1 エチクロゼートの散布時期・濃度の違いが着色に及ぼす影響

処理区	着色程度別割合 (%)					着色歩合 平均(分)
	1分以下	2分	3分	4分	5分以上	
A区	1.3	25.0	45.0	15.0	13.8	3.2 ^a
B区	5.0	33.8	41.3	12.5	7.5	2.9 ^a
C区	23.8	46.3	27.5	2.5	0.0	2.1 ^b
D区	17.5	58.8	23.8	0.0	0.0	2.1 ^b

注1) 2007年10月1日収穫、調査

2) Tukey法により異なる異符号間に有意差あり

表2 エチクロゼートの散布時期・濃度の違いが果実品質に及ぼす影響

年次	処理区	1果	果肉	糖度	クエン	糖酸比
		平均重	歩合	(Brix)	酸含量	
		g	%		g/100ml	
2007年	A区	81.5	80.6	12.7 ^a	0.83	15.4 ^a
	B区	81.9	80.0	12.5 ^a	0.88	14.3 ^{ab}
	C区	81.3	81.2	12.3 ^{ab}	0.81	15.3 ^a
	D区	85.3	80.3	11.2 ^b	0.89	12.6 ^b
2006年	A区	101.0	79.5 ^a	11.2	0.95 ^a	11.8
	B区	101.0	79.3 ^a	11.3	0.86 ^b	13.2
	C区	102.0	80.9 ^{ab}	10.9	0.81 ^c	13.4
	D区	108.0	82.2 ^b	10.4	0.90 ^a	11.5

注1) 2007年10月1日、2006年9月29日調査

2) Tukey法により異なる異符号間に有意差あり